

事務局:

愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部内 / 名古屋市千種区鹿子殿 1-1 Tel 052(762)6111 Fax 052(763)5233

Contents

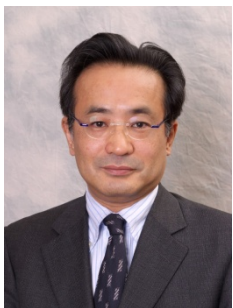
• 代表幹事に就任して	津金昌一郎 -1
• 前代表幹事より ご挨拶	津熊秀明 -2
• 第 36 回 日本がん疫学・分子疫学研究会総会を開催して	永田知里 -3
• 第 36 回 日本がん疫学・分子疫学研究会総会を振り返って 一学会準備から終了まで	和田恵子 -4
• 総会 レポート 1 東京ガス・スタディ: 職域における運動疫学研究	澤田 亨 -4
• 総会 レポート 2 個別化医療へ向けた遺伝子多型研究	松田浩一 -5
• 平成 25 年度日本がん疫学・分子疫学研究会の幹事会議事録要旨	6
• 新幹事について	8
• 平成 24 年度会計収支報告および平成 25 年度修正予算案	8
• 事務局からのお願い	9
• 編集後記	9

私が、がん疫学・分子疫学研究の道に進んだ経緯を簡単に紹介させていただきます。大学院では、ボリビアを中心として、南米の日系移民の置かれている環境や生活習慣・健康などをテーマとした人類生態学的研究をテーマとして学位をとりました。大学院修了後間もなく、国立がんセンター研究所（当時）で、病理研究者が疫学部長になり、疫学の研究者を必要としているので赴任するようにと当時の教授に命ぜられ、不本意ながら（今では、結構合っていたのかもしれないとも思っていますが、、、）、がん疫学研究の道に進むことになりました。大学院において疫学の知識をかじっただけの私が、ほぼ唯一の疫学経験者であり、さらに、当時の国立がんセンターには統計学の知識を有する研究者もいなかったために、臨床医や基礎研究者の統計解析を担当する立場にもなり、今から振り返ると恐ろしくもなります。一方で、当時の研究所は、分子生物学花盛りであり、そのような環境におかれたことが、分子疫学に抵抗なく入り込めたきっかけにもなりました。当時、病理学の学位をとり、疫学部のリサーチ・レジデントとなった本研究会の副代表幹事の村村春彦先生と共に、日本における分子疫学研究の緒を模索したのが懐かしく思います。

さて、本研究会も記述疫学の時代からの歴史のあるがん疫学研究会と疫学研究の最先端とも言える比較的新しいがん分子疫学研究会が平成 22 年に合併して 3 年を経過しました。その間、研究会総会としては、がん予防学会と共催した京都（津熊会長）、単独開催の広島（小笹会長）と岐阜（永田会長）と 3 回開催されましたが、各々の会長の采配のお蔭もあり、いずれもとても充実した内容であり、合併して良かったものと痛感しています。今後は、疫学という方法論を共有してがん研究を行う本研究会と、がん予防という目的を共有して様々な方法論を用いて研究を行う日本がん予防

代表幹事に就任して

国立がん研究センターがん予防・検診研究センター
津金昌一郎



この度、ただ年齢まわりという理由により、代表幹事に就任させて頂きました。そのように決まることも、ある意味、本研究会の和気あいあいとした雰囲気を表すものかと思えます。学会のような競争的な原理も働きながら、より良

い研究を発表しようという厳しさに欠ける面もあるかと思いますが、本研究会は、これまでもそうであったように、お互いが学びながら向上して行くという、そのような場になればと考えています。

学会との協力関係を如何に築いて行くかが課題になるかと考えます。

本研究会が直面する問題として、私が最近感じていることは、30代半ばよりも下の世代の若手層が少ないようであることです。先に記したように、私のがん疫学の道に足を踏み入れた当時と比べれば、1980年代後半から1990年代に仕掛けられた大規模コホート研究や症例対照研究の成果を摘み取る層においては、それなりの人材が育てて来たように思います。しかしながら、近年に仕掛けられているいわゆるゲノムコホートと称される大規模コホート研究などの情報がリッチな研究の成果を摘み取る世代を育てて行くことが、20年後のがん疫学・分子疫学研究の発展において欠かせないと考えます。そのためにも幹事・会員の皆様の益々のご尽力を期待しています。

旧代表幹事よりのご挨拶

大阪府立成人病センター がん予防情報センター
津熊秀明



日本がん疫学研究会と日本がん分子疫学研究会が合同しての最初の代表幹事にご指名頂き、私としては大変荷の重い役柄でしたが、皆様方のご支援を得、この度何とか3年の任期を終えることができました。本会の幹事会諸兄、役員

の方々、とりわけ副代表幹事を務めて下さった相村春彦先生、また庶務幹事として会の運営を支えて下さった松尾恵太郎先生に、心からお礼申し上げます。代表幹事を務めた3年間を私なりに総括し、ご挨拶に代えさせていただきます。

合同に至った経緯はさて置き、両研究会には錚々たる研究者が集い、学問的にも社会的にも極めて価値の高い研究成果の発表と切磋琢磨を通じての次世代研究者を輩出してきた伝統がありました。その為か、合同に際して作成された研究会規約では、幹事会には「今後の活動計画や中期目標をたて、総会に報告する」義務を課すなど、幹事会役員にとっては重い責務を負いながらの3年間でした。代表幹事就任の年に、新研究

会の活動計画や研究会で取り上げるべきテーマについて議論したり、私自身関心の高かったがん対策への提言機能の在り方を討論したりするワーキンググループを幾つか設け、幹事会として考えを取りまとめる際の論点整理をお願いしました。浜島信之先生や祖父江友孝先生、菊地正悟先生、山口直人先生には、ワーキンググループをリードし、ニューズレターの紙面や幹事会場で貴重なご意見を頂戴しました。幹事会では、これらに関して毎回議論を重ね、その概要は幹事会議事録や総会で報告しました。幹事会として必ずしも一定の結論が得られた訳ではありませんが、この間の議論と、とりわけ研究会会長をお勤め下さった先生方のご尽力のお蔭で、合同に際して多少なりとも抱いた運営上の危惧は解消され、新研究会の運営は、各会員に概ね好意的に受け入れて頂いたのではと思っています。任期終了とともにワーキンググループも解散とさせて頂きましたが、ご協力下さいました諸先生方に、改めて感謝申し上げます。

本研究会の喫緊の課題として、会員数の減・頭打ち傾向への対処があります。新会員の獲得をどうするか、これは本会の将来に係る重大な問題です。研究成果を発表し、討議する機会は、本研究会に限らず、今や日本癌学会や日本疫学会、日本がん予防学会など、様々あります。本研究会では、従来、一般発表を極力少なくし、時宜を得たシンポジウムやワークショップを数多く取り入れることで、特徴ある魅力的な研究会開催に努めて来た訳ですが、こうした方針を継承するとともに、教育的な内容を盛り込んだり、社会的にも関心の高いテーマをいろんな角度から深く掘り下げるセッションを設けるなど、新規の方にも参加し易い企画を心掛けては如何でしょう。研究分野の専門性が高まる一方、他分野の知識・ノウハウを学ぶことの意義は計り知れません。本研究会が、単に学術研究の発表・討議の場としてではなく、参加することで見識が深まり、明日への糧となる触発・研修の場ともなるよう、創意工夫が必要だと感じています。

新代表幹事にご就任の津金昌一郎先生のもと、本会が一層発展しますよう、心よりお祈り申し上げます。

第36回 日本がん疫学・分子疫学研究会総会を開催して

岐阜大学大学院医学系研究科 疫学・予防医学分野
永田知里



第36回日本がん疫学・分子疫学研究会総会は、2013年6月20日(木)・21日(金)に岐阜で開催させていただきました。多くの先生方にご参加いただき、誠にありがとうございました。少人数で準備を進めて参りましたが皆さまの

ご支援・ご協力でどうか無事務めを果たせたのではないかと思います。

総会テーマは「アイデアとミッション」でしたが、そもそも今回の研究会開催は、私にとって、年齢を考えると避けられないミッションでありましたし、また、過去の開催例から窺われるように、その企画についてはアイデアを要求されるものでした。こういった催し事は私の大の苦手ですが、とにかく試練と思って覚悟しました。そのため熱が入ったせいか、特別講演では、お断りしたいと言われる黒木登志夫先生に無理やり頼みこむという思いもかけぬ底力が出ました。

黒木先生のご講演は、IARCでのヒト発がん物質同定、べき乗則の話など、研究者としての日々の営みの中から、がん予防に関わる事柄で心に残ることを述べられたものでした。淡々と語られながら、興味と共感を掻き立てられる、示唆に富むメモワールでした。それにしても、黒木先生が、この特別講演を今は亡き清水弘之先生に捧げると言われ、青木國雄先生が、清水先生に代わって座長を務めると言われたときは感無量で、お二人のお心遣いに感謝いたしました。続いての特別講演IIでは、櫻井治彦先生より、IARCの評価では発がん物質と同定されなかった1,2-ジクロロプロパンが、大阪市の印刷事業所での胆管がん発生の原因物質ではないかというお話を伺いました。ホットな話題で原因物質(候補)に辿り着く過程はドラマチックでさえありますが、それにしても、このようなリスクが今まで見逃されていたことは研究者として反省すべきでありましょう。

招待講演では、Dr. Gertraud Maskarinecより、がん疫学の成果と今後の展望について述べていただきましたが、その達成度や問題点を考えると容易に明るい未来像が描けるものでもありません。この隘路を打開すべく新しい展開を模索する必要があります。

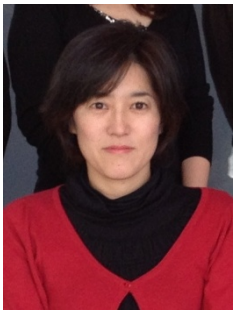
シンポジウムは、がん疫学・分子疫学研究をアイデアとミッションという二つの軸から眺めるという企画で、シンポジウムI(アイデア)では、発がん物質同定のためのDNAアダクトーム法(松田知成先生)、多層カーボンナノチューブの発がん性(豊國伸哉先生)、ナノテクノロジーを医療技術に応用するナノメディシン(渡邊昌俊先生)、HPV関連がん(郡山千早先生)、職域における運動疫学研究(澤田享先生)とオリジナリティの高い研究をご紹介いただきました。また、シンポジウムII(ミッション)では、個別化医療を目指したゲノム解析の展開(松田浩一先生)、ピロリ菌の除菌等、胃がん予防の在り方(菊地正悟先生)、遺伝子情報を含めたコホート研究についてJ-MICCスタディ(若井建志先生)とJPHC-NEXT(澤田典絵先生)とインパクトの高い成果が期待される研究をご紹介いただきました。両シンポジウムとも、どちらかに特化しているというよりアイデア性もミッション性も同時に高い研究ばかりでした。ある意味では、バランスのとれた理想的な研究が多く、そこに優秀な人材も集中するというのでしょうか。但し、研究者個人の立場からは、この2つの軸は個と全体と捉えることもできるかもしれません。個の尖った若手研究者が多く輩出され、いずれ大きなミッションを担って欲しいと願いました。

演者の先生方には、研究のアイデア性やミッション性を強調していただくと共に主観まで述べてもらうという勝手なお願いをいたしました。お陰様で、研究の面白さや学問性に加え、頼もしいあるいは鋭いメッセージをいただくなど意義深い時間となりました。座長の先生方も開催前からお知恵拝借し、当日も私の趣意にご配慮いただくなど、お気遣いに支えられました。また、参加された先生方からは、総会が何とか成功裏に終わるようご協力いただいていると身にしみて感じました。鶺鴒はやや雨模様となり、それこそ蓑が要るところでしたが、むしろ情趣を楽しまれたともお聞き

しました。柄にもなく浪花節風になりましたが、あらためて皆様のご厚情に感謝申し上げます。

第36回がん疫学・分子疫学研究会総会を振り返って 一学会準備から終了まで一

岐阜大学大学院医学系研究科 疫学・予防医学分野
和田恵子



研究会の準備は、開催1年前の広島から始まりました。当教室スタッフがこぞって、会場の視察、情報収集に訪れた時です。「来年の岐阜開催を宣伝に行こう！」と意気揚々に学校祭風？のポスターを作り、学会と懇親会の会場に貼付させていただきました。とはいえ、その時の私は、後に事務局を仰せつかることも知らず一番天気で見下してはほぼ戦力外でしたが、優秀な仲間達が会の進行や会場設営等についてたくさんのメモや写真を残してくれました。

本格的な準備は、年が明けてから。月1回の教室会議で、学会運営についての話が多くなりました。プログラム内容、座長や演者、時間割を決定し、会場を手配、会場内の設置や人員の配置、進行とだんだん詳細を詰めていきました。実は、会場の決定には、スタッフ一同がヤキモキしました。昨年ちょうど岐阜大学のサテライトキャンパスが岐阜駅前に設置されたのを受け、当初より会場利用を希望していたのですが、利用の申請が直前の3月にしかできないと言われ心配の日々を過ごしました（民営の他の施設も予約していました）。大学の施設を利用できたことは、大幅な経費削減だけでなく、運営においてもきめ細かな配慮やサービスが展開できたという点でアドバンテージとなりました。

学会当日。準備が悪かったり思ってもいないことにつまずいたり、事務局はバタバタしました。特にポスター発表では、会場が狭かったことと十分な討論時間を用意できなかったことで、熱気あふれる討論をされていた発表者、参加者の先生方に窮屈な思いとともに討論の打ち切りをお願いすることになりましたことを大変申し訳なく思います。それでも、各スタッフの

わずかな頑張りをご講演、ご参加の先生方の寛大なお気遣いと許容でもって、大事には至らず無事に終了することができました。スムーズに運営することが思っていた以上に難しいことを痛感するとともに、今まで自分が参加してきた学会が多くの皆様のご尽力によって支えられていたことに改めて感謝しました。

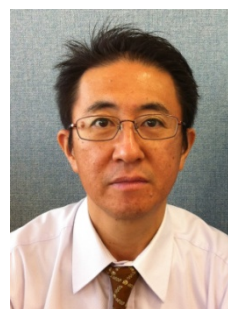
学会のメインでもあるプログラム構成については、会長自らが強い意志で先導してくださいましたので、事務局が右往左往することはありませんでした。演者、座長の先生方からもご理解とご協力をいただき、大変メリハリのある学問性の高い有意義な会議となったと感じています。また、「アイデアとミッション」をテーマにした本総会の抄録集と会場に、画家中風明世氏からアイデアをいただくことができたことも幸運でした。懇親会での鵜飼観覧は、日本の伝統芸能の継承という点で国のミッションを垣間見たといえるのかもしれませんが。

残念ながら、発表や参加者の数が盛大とはいきませんでした。来ていただいた先生方には学会の内容だけでなくお越しいただいたこと自体を楽しんでいただけるよう「おもてなし」の精神でお迎えしたつもりです。不行届きの点多々ございましたが、何卒ご容赦いただきますようお願い致します。最後になりましたが、本会議にご支援、ご協力いただきました多くの皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

第36回がん疫学・分子疫学研究会総会レポート1

東京ガス・スタディ：職域における運動疫学研究

国立健康・栄養研究所 健康増進研究部
澤田 亨



第36回がん疫学・分子疫学研究会総会では、光栄にも総会会長の永田知里先生からご依頼をいただき、シンポジウムⅠ：「アイデア性の高い研究の紹介」として職域における運動疫学研究を紹介させていただきました。ありがとうございました。

東京ガス・スタディとは東京ガス株式会社の社員を対象に実施しているコホート研究です。研究のフィールドとなっている東京ガス株式会社は首都圏に天然ガスを供給しているガス会社で、社員数は約1万人です。1978年から社員は毎年、自転車エルゴメータによる運動負荷テストを実施しており、体力の中で最も健康と関連が深いと考えられている全身持久力（最大酸素摂取量）を測定しています。最大酸素摂取量は健康指標であると同時に身体活動量の客観的な指標であり、最大酸素摂取量によって日常の身体活動量が推定できると考えられています。

東京ガス・スタディは、実は私が運動指導者として東京ガス株式会社に入社した1985年から追跡を実施しているコホート研究で、本研究会の先生方から直接、あるいは間接的に指導を受けながら運営してきた職域のコホートです。1985年に測定した最大酸素摂取量と1986年以降に観察した生活習慣病罹患率やがん死亡を含む死亡率との関係性を評価し、いくつかの論文として発表しています。これまでに得られた結果として高血圧罹患に関する研究では、最大酸素摂取量が「最も低い群」と比較して「最も高い群」の相対危険度が47%低いことを報告しています（Clin Exp Pharmacol Physiol: 1993年）。また、2型糖尿病罹患については最大酸素摂取量「最も低い群」と比較して「最も高い群」の相対危険度が44%低いことを（Diabetes Care: 2003年）、さらに最大酸素摂取量が「低下している群」と比較して「向上している群」は相対危険度が67%低いことを報告しています（Diabetes Care: 2010年）。また、生命予後に関しては「総死亡」および「がん死亡」をエンドポイントに設定したコホート研究を実施しています。総死亡に関する研究では、最大酸素摂取量が「最も低い群」と比較して「最も高い群」の相対危険度が61%低いこと（日本公衆衛生雑誌: 1999年）、全がん死亡については相対危険度が59%低いことを報告しています（Med Sci Sports Exerc: 2003年）（図）。

最近では新たなコホートを立ち上げ、最大酸素摂取量以外の指標を用いた運動疫学研究を実施しています。具体的には、歩数だけでなく身体活動の強度も測定できる加速度計を用い、2009年9月から2010年8月の期間において約5,000人を対象に1週間の身体活動量を測定しています。身体活動量の指標には、① 総歩数、

② 3MET以上の身体活動時間、③ 3~6METの身体活動時間、④ 6MET以上の身体活動時間を用いてこれらの身体活動指標と生活習慣病罹患率の関係を縦断的に評価する予定です。また最近、筋力や筋量と生活習慣病罹患率あるいは死亡率との関係性に注目が集まっていることから、2011年10月から2012年9月の期間において約7,000人を対象にインピーダンス法による筋量測定と握力計による筋力測定を実施しました。今後、筋量や筋力と生活習慣病罹患率の関係についても縦断的に評価する予定です。

昨年（2012年）の6月末に東京ガス株式会社を退職して現在の研究所にお世話になっておりますが、今後も東京ガス株式会社の産業医の先生方と共同研究を実施して身体活動/運動と健康の関係を調査していきたいと考えています。引き続きご指導いただきますようお願いいたします。

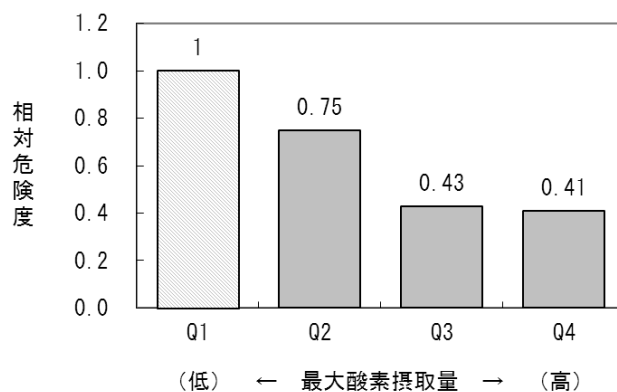


図1. 最大酸素摂取量と全がん死亡の関係
(男性9,039人:平均16年間追跡)

第36回がん疫学・分子疫学研究会総会レポート2

個別化医療へ向けた遺伝子多型研究

東京大学医科学研究所 シークエンス技術開発分野
松田 浩一



糖尿病や癌などの疾患は生まれつきの体質（遺伝因子）と生活習慣の複雑な相互作用によって発症に至る多因子疾患であり、例えば癌の場合生活習慣などの環境因子の発症原因に占める割合の60-80%、残りの20-40%が遺伝因子によるとされています。喫煙、飲酒や肥満などの生

活習慣や各種の感染症が発癌リスクを高めることはこれまでの疫学研究の結果明らかとなっておりますが、発癌に関わる遺伝因子についてはその一部しか知られておりませんでした。病気の発症や薬の効果・副作用に関連する遺伝子が明らかとなれば、病気の予防やより効果的な治療の実現に有用となると期待出来ます。

我々の研究グループは2003年にスタートしたオーダーメイド医療実現化プロジェクトの管理・運営を行っており、この間60を超える医療機関との協力体制を構築し、47疾患、約20万人分のDNA、血清試料と詳細な臨床情報を収集しました。本年度より第3期(5年間)がスタートし、新たに10万人のサンプルの収集も開始しております。さらにこれらの試料を用いた疾患感受性遺伝子研究も並行して進めております。

近年浸透率が低い疾患感受性遺伝子の同定を目的として、全ゲノム関連解析が幅広く用いられるようになってきました。我々はHCV陽性肝癌1394症例、コントロール5486症例について、55万ヶ所の遺伝子多型の頻度の違いを解析した結果、MICA遺伝子上の1塩基多型が肝癌の発症と関与する事を発見しました。さらにこの1塩基多型と血液中のMICA値が強い相関を示しており、肝癌のリスクが高い人では血中のMICA濃度が有意に低値となりました。MICAはウイルス感染細胞やがん細胞で高発現し、Natural killer細胞表面のNKG2Dのリガンドして殺細胞効果を誘導します。我々の解析結果より、HCV感染後MICAが高発現となる方ではNK細胞の作用によって発癌が抑制されやすくなるのに対し、MICAが低値の方では発癌リスクが高まると考えられ、HCV陽性肝癌の発症に自然免疫機構が重要な役割を果たすことを明らかとしました。さらにMICA以外の複数の遺伝因子が慢性C型肝炎から肝硬変、肝癌の発症に寄与することを見出しており、これらの遺伝因子を調べる事で慢性C型肝炎患者の予後予測が可能になると期待できます。

また十二指腸潰瘍患者1043人、コントロール21694名の解析によって、PSCA及びABO遺伝子が十二指腸潰瘍の発症リスクと関連することを明らかとしました。PSCA遺伝子の多型は胃癌発症とも関連することが既に報告されており、興味深いことに十二指腸潰瘍のリスクとなる遺伝子型は胃癌のリスクを下げる事がわかりました。同じピロリ菌が原因となるにもかか

わらず十二指腸潰瘍患者は胃癌のリスクが低い事がこれまでの疫学研究で知られていましたが、我々の研究成果によってその原因の一部がPSCAの遺伝子型の違いによるという事が分子レベルで解明されました。その他にも尿路結石や大腸癌などの疾患や血液検査値、身長、初潮年齢等に関わる遺伝子、喫煙習慣や飲酒量、コーヒーの摂取量にも関連する遺伝子も同定しており、我々の生活習慣も遺伝因子が関係することが分かって来ました。

我々の研究グループはこれまで200編の論文、263個の新規薬剤・疾患感受性遺伝子を明らかとしました。またオーダーメイド医療実現化プロジェクトでは、これまでに収集した全20万人の遺伝子多型のタイピングを本年度中に終了させる予定で、将来的にはこれらの情報は公的データベースでの公開を目指しております。これらのデータによって、日本人の遺伝子多型情報のデータベースが整備され、これらの情報を医療の現場に応用することで、個人の体質に応じた最適な治療法の選択、いわゆる個別化医療が可能になると期待出来ます。

平成25年度 日本がん疫学・分子疫学研究会 幹事会議事録要旨

日時：平成25年6月20日(木) 11:30-13:00

場所：岐阜大学サテライトキャンパス 多目的講義室(中)

出席者：津熊秀明、相村春彦、松尾恵太郎、石川秀樹、伊藤秀美、井上真奈美、岩崎 基、小笹晃太郎、末岡榮三朗、祖父江友孝、田中英夫、津金昌一郎、永田知里、浜島信之、林奉権、本荘 哲、菊地正悟、若井建志 (以上18名)

事務局：松原有希

欠席者：秋葉澄伯、酒井敏行、清水憲二、郡山千早、鈴木貞夫、嶽崎俊郎、竹下達也、田中恵太郎、玉腰暁子、坪野吉孝、中別府雄作、中村祐輔、西 信雄、西野善一、濱島ちさと、林慎一、樋野興夫、三木義男、溝上哲也、森 満、山口直人、吉川裕之 (委任状あり：18名)

1. 庶務報告

松尾庶務幹事より、以下の報告がなされた。

(1)会員数：平成25年6月1日現在で会員数は237名で、前年より11名減（賛助会員1名含む）。新入会は1名。

(2)News Letterの発行：No.106、107が林 奉権、伊藤秀美 両編集委員により発行された。

2. 平成24年度会計報告、監査報告

平成24年度の会計収支報告が松尾庶務幹事によって行われ、菊地監事から監査報告された。（翌日の会務総会にて承認）

3. 平成25年度予算

平成25年度の収入見込みの変動に伴う修正予算案が松尾庶務幹事より提出され、承認された。

4. 役員の一部改選・選出・推薦・任期

平成21年度に新研究会が発足し、今年度で幹事の3年の任期が満了し、改選の時期であることが確認され、次のように承認決定された。

《功労会員について》 今年度、秋葉幹事、森幹事、山口幹事、津熊代表幹事を功労会員として推薦することとなった。

《次期代表幹事・副代表幹事について》 津熊代表幹事より、次期代表幹事に津金幹事、次期副代表幹事に梶村副代表幹事が推薦され承認された。

《次期会計監事について》 石川幹事、郡山幹事が推薦され、承認された。

《次期幹事について》 本日出席している幹事については再任が確認された。新たな幹事候補として、次の会員が推薦された。（順不同・敬称略）

松田浩一、山本精一郎、林 櫻松、宮代 勲、笹月 静、片野田耕太、渡辺昌俊、松田知成、西本 寛

《退任幹事について》 秋葉幹事、玉腰幹事、津熊前代表幹事、坪野幹事、森幹事、山口幹事、林（慎）幹事、吉川幹事、清水幹事、中村（祐）幹事、酒井幹事、中別府幹事。

翌日の会務総会で推薦者の報告がなされ、その後個々に幹事就任の内諾を得ることが確認された。

5. 研究会の今後の活動計画、運営等

以下の様に報告と提案がなされた。

(1)若手研究者育成のためのセミナー開催について、浜島（信）幹事より。

現時点では各幹事からこれについての提案・要望等はなく、まだ具体的にセミナー等を行う気運ではないと考える。今後の各幹事からの提案や、各総会長の意見を都度汲んで必要に応じて進めていくのが良いという提言がなされた。

(2)オリジナリティについて、石川幹事より。

現在臨床研究の分野では、統計学の専門家との協同研究の必要性が強く認識されている。統計学者より研究について意思疎通のしやすい疫学者が協同研究者となり、臨床研究の分野とのパイプを太くするのが良いのではないかと提言がなされた。これに対し津金幹事より、研究の方向性・着地点を相互に確認することが重要だとの意見が出された。松尾幹事からは、まずは総会のセッションやシンポジウムに臨床研究分野の研究者に参加を依頼して具体的な討議を行うこと等が、研究会のプロモーションにも繋がり臨床研究分野との協同研究のきっかけにもなるのではないかと提言がなされた。

津熊代表幹事より、現在研究会という特性を生かして、ある程度オリジナリティのある活動ができていると思われるが、今出された意見を集約し改めて代表幹事としての意見をまとめたいとの意見が出された。

(3)がん政策への提言機能について、祖父江幹事・菊地監事より。

研究会という母体の性質上、社会的に政策提言を積極的に行うよりは、内部の専門家の議論を高めるところに重きをおくことが望ましいのではないかと提言がなされた。

6. News Letter 関係

伊藤幹事（NL 編集委員）より、林幹事の編集委員任期終了の報告とそれに伴い、岩崎幹事が次期編集委員として推薦され、承認された。

また、今後の役割分担として従前は執筆者選考・執筆依頼・編集までを編集委員が一括して行っていたが、今後は執筆者選考のみを編集委員が行い、執筆依頼・編集は事務局が行うこと、それとあわせて発行月を4・11月から2・8月に変更したいという提案がなされ、承認された。今年度の8月については、総会報告という形で簡易版を発行し、その次は2月発行となることが確認された。

発行の方法を、現在は希望者へは紙媒体の郵送も行っているが、次号以降はホームページへの掲載と、メーリングリストでの掲載案内のみとすることが松尾庶務幹事より提案され、承認された。

7. 平成 26 年度の学術総会の会長と開催地

本日欠席の溝上幹事に代わり、第 21 回がん予防学総会長の津金幹事より紹介された。

8. 平成 27 年度の学術総会の会長の推薦

次々年度（第 38 回）の学術総会の会長として梶村副代表幹事(浜松医大)が推薦・承認された。開催についての時期、場所、テーマなどについては未定である。

9. 平成 25 年度予算案（松尾庶務幹事）

収入の減少に伴い、事務局謝金・ホームページ編集更新料・幹事会弁当代の予算減を含む平成 26 年度の予算案が松尾幹事より提示され、承認された。(翌日の会務総会にて承認)

10. その他(会員からの意見)

特になし。

幹事会以後の新幹事について（敬称略・順不同）

代表幹事： 津金昌一郎

副代表幹事： 梶村春彦

監事： 石川秀樹、郡山千早

庶務幹事： 松尾恵太郎

幹事： 井上真奈美、小笹晃太郎、菊地正悟（HP 担当）、鈴木貞夫、祖父江友孝、田中恵太郎、濱島ちさと、浜島信之、本荘 哲、溝上哲也、田中英夫、嶽崎俊郎、竹下達也、西野善一、永田知里、山本精一郎、伊藤秀美（NL 編集委員）、岩崎 基（NL 編集委員）、笹月 静、若井建志、西 信雄、片野田耕太、末岡榮三朗、林 奉権、樋野興夫、三木義男、林 櫻松、渡辺昌俊、宮代勲、松田浩一、松田知成、西本 寛

平成 24 年度会計収支報告および 平成 25 年度修正予算案

平成 24 年度収支報告書

		平成 24 年度 決算	平成 24 年度 予算
収入	前年度繰越金	1,201,982	1,201,982
	年会費	1,165,000	1,332,000
	利息	229	300
	合計	2,367,211	2,534,282
支出	NewsLetter	51,055	60,000
	人件費	360,000	360,000
	謝金	30,000	120,000
	総会	687,435	685,000
	通信	30,000	120,000
	消耗品・振込 など	34,641	30,000
	合計	1,193,131	1,375,000
次年度繰越金		1,174,080	1,159,282

平成 25 年度修正予算案

収入	前年度繰越金*1		1,174,080
	年会費	5,000 円*180	900,000
		1,000 円*10	10,000
		50,000 円*1	50,000
	利息		300
	合計		2,134,380
支出	News Letter	印刷・発送	60,000
	人件費	30,000 円*12 か月	360,000
	謝金*2	HP 更新料 10,000 円*6 か月	60,000
	総会	開催補助金	600,000
		幹事会 会議室*3	10,000
		幹事会 弁当・お茶	35,000
		資料準備等雑費*4	5,000
		旅費 (岐阜 2 日)	4,000
通信*5	年会費・会員への郵送物	40,000	
消耗品・振込料など*6	消耗品	20,000	
	振込手数料・振替料	20,000	
	合計		1,214,000
次年度繰越			920,380

- * 1 繰越金額を確定額に修正
- * 2 平成 24 年度の実績から HP 謝金を 8 か月から 6 か月に変更
- * 3 幹事会用会議室費用を新しく予算として確保
- * 4 幹事会発生する資料準備等雑費を新しく予算として確保
- * 5 平成 24 年度の実績から 60,000 の予算を 40,000 に変更
- * 6 平成 24 年度の実績から 70,000 の予算を 40,000 に変更

事務局からのお願い

*** 所属・連絡先等の変更届け**

ご所属、連絡先 (住所・TEL・FAX・E-mail) などに変更がありましたら、速やかに事務局へのご連絡をお願いいたします。

News Letter、郵便物、その他のお知らせが円滑にいきますようご協力のほどよろしくお願いいたします。

*** 年会費納入のお願い**

5 月に平成 25 年度の年会費振込みのお願いを送付させていただきました。お支払いがまだの方はご対応

をお願い致します。振込用紙を紛失された方は、その旨事務局までご連絡ください。

編集後記

本号は、6 月に行われました第 36 回日本がん疫学・分子疫学研究会総会の特集ということで企画しました。まず、新しく代表幹事に就任された津金昌一郎先生と前代表幹事の津熊秀明先生に寄稿をお願いしました。特に津熊先生は新研究会発足後の最初の代表幹事としてご尽力され、改めて感謝を申し上げます。また両先生がご指摘の会員数の減少、特に若手研究者が少ないことについて、危機感を持って取り組まなくてはいけないと再認識いたしました。

次に会長の永田知里先生と事務局を担当された和田恵子先生に研究会の報告をお願いしました。「アイデアとミッション」というテーマのもとに企画されたシンポジウムおよび特別講演は、私にとって研究のありかた、今後の方向性を考える上で、非常に有意義なものでした。改めて、永田先生、和田先生をはじめ関係の先生方に御礼申し上げます。

さらに研究会報告の一環として、シンポジウムでご発表された澤田享先生と松田浩一先生には、発表内容を含めご自身の研究紹介をお願いしました。澤田先生の身体活動に関するより詳細な曝露評価情報を用いた研究、また松田先生の大規模かつ大量データを背景にした疫学研究は、目指すべき方向性として大変勉強になりました。

最後になりましたが、本号より編集委員の林泰権先生に変わり岩崎が、伊藤秀美先生と一緒に担当することになりました。どうぞよろしく願い申し上げます。また本号から執筆依頼から編集まで事務局で作業して下さることになりました。事務局の負担が重くなる一方、編集委員としては企画に専念できますので、より充実した News Letter にできるよう努めてまいります。ご意見・ご要望などございましたら、お気軽に編集委員までお寄せください。

(岩崎 基、伊藤秀美)